部落問題文芸・作品選集

第三八巻

田口桜村著

東風物語

世界文庫版

部落問題文芸作品選集　第三十八巻

昭和五十二年二月二十五日発行

発行者　松本富夫

発行所　株式会社世界文庫

東京都目黒区洗足二―一二―一五
電話〇三（七一六）六一五一（代表）
（七一三）九二四四
振替　東京　四―七八四九八番

定価は箱帯に表示

落丁、乱丁本はお取替えいたします。

この小著を我が父の膝下に献ぐ

自序

何時の世、如何なる慣例よりしてか、世に所謂穢多若くは、新平民と呼ばるゝ階級が出來て、この階級に生れた人々は、生涯賤しき者と見做されて同じ人と生れながらに、蔑すみ疎んぜられて、朝な夕な悲しい運命に泣いて居る。

私は年來この不公平な階級を有する社會に對して、非常なる不平を有つと同時に、強いてこの樣な階級の下に、押しこめられた薄命な人々に對し

て頗る同情を捧げ、機會が有つたら何かに托して、このやうな不都合極まる特殊階級打破の聲を擧げたいと思ふて居た。

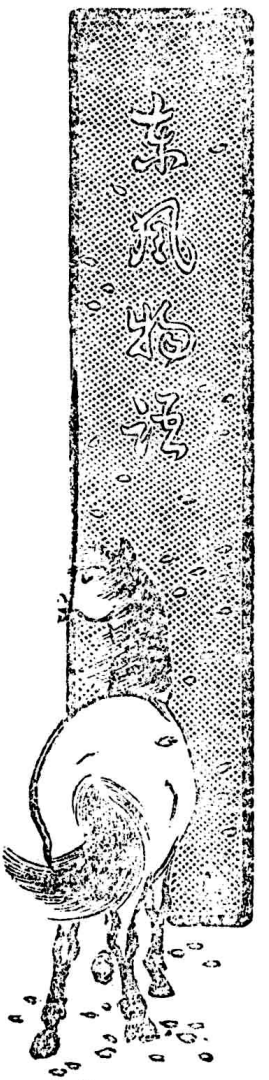
小說東風物語は以上の理想に基づいて成つたる、一篇の悲劇物語である。

これは昨年日本活動寫眞株式會社の需めに應じ花吹雪と題して執筆したもので、東京市内を始め全國活動寫眞常設館に於て興行されたのを、三芳屋主人の乞に任せ小說體に改作し上梓したのである、篇中嵐山花祭り件に組絲氏の「春の歌」の作意を借りたのは、彼の作に深く私淑して居たからでこれが爲めに忌はしい誤解を受けぬもうついでに一言して置く。

大正二年蟄生の下句　　待乳山の畔にて

著者

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com



田口櫻村

一　姉と弟

大和の一角。猪狩の他にはあまり用もなき洞仙峰の山續き。伊賀の國境から西東に走つた山脈の斷れ目に當つて何やら云ふ嶽の頂きから、一昨年の山火事に燒けた官有林の彼方、裾に廻る木津川の流れを隔てた小山こそ、南朝の興亡史を今の世にまでまざ〳〵讀ましめ、遊子詩客を嘯かしむる例の笠置山である。

此の洞仙峰の麓に、さゝやかな人家六七戸を有つ落窪ケ谷と、これと隔つて南に半里の蘆澤村の百二十九戸、これ丈けの炊煙が朝な夕な山々の裳裾に棚曳いて僅かに人里と呼ばるゝ。とはいへ木津へ十里、笠置へ四里の山阪を越えねば、村らしい村、町らしい町へは行くことの出來ぬ、まつこと猪猿相手の山の中。

折しも嚴冬の二月。冬に寂びたる空のどんよりとして、日の光り行く雲に影薄く、さと落し來る風の峰の松ケ枝を吹きかすめてさら〳〵と雜木林の枯葉に戰げば、驚きて飛び立つ百舌二羽、鳴きつれて行く彼方に今日の名殘の日影は斜めに僅かなる光をば、杉木立にとゞめて、やがて如月の一日も暮れんとする。

頂に近い三の平、目印の倒杉から馬の背落しを、一氣に一伸すれば、もう落窪ケ谷には一里半足らずの近い路。されば山深く入る樵人も、炭燒の爺も、山歸りの疲勞れた足を此の平地に幾所かの切株に休憩てゆくのが慣例となつて居た。

今しも向山の方から、薪木拾ひの歸途らしい二人の年若い男女。姉弟とも見える

らしいのが、背負子にあまる枯枝の束を重さうに擔いで、屐のあたりまでも生ひ延びた草を押し分け〳〵登つて來た。

『姉さんや、もう三の平まで來たゝ。上りの困難なのに比較て、下りは早いもんだなア』

と、生えきつた髪を刈らうとせず、延びるに委せた禄な頭をした……それでも容貌は姉に似て鄙男には珍らしく整つた男振、それに色のくつきり白い弟は斯う呼びかけた。

手織らしい粗製木綿の綿入ながら、それでも流石年頃の娘と云ふ所を　襟元から溢れる赤地の半襟に見せ、汕氣のきれかゝつた銀杏返しに、千鳥模様を置いた手拭で姉さん冠りにし、日に焦けるのを厭ふての手甲穿つた小手先に、背の荷綱を絡らんだところは、あはれにものやさしい。下締に狹んだ着物の裾からこぼれる腰巻の下、白い脚絆につもつた砂埃は、今日の疲勞を無言に語る。弟に呼びかけられた姉

は、手に持つた野生の梅の二枝の花を傷けまいと庇ひながら、

『そりや上りが困難で下りの樂なことは昔から極つて居るぢやないかね。それでも今日は昨日より仕事が捗つたから、此處へ來ても明るいけれど　一昨日のやうに、こゝでとつぷり日が暮れちまつたら、また歸りが遲くなつて、どないにお父樣が心配するか知れやしないだよ』

『また姉さんは氣の弱え事ばつかし云つて居るだ。なあに幾ら山路で日が暮れべえと、夜にならうと、俺らがついて居るだ、眞逆に百足猿にくすぐられる事もあんめえさ』

『當り前さ、今時こんな里近く百足猿なんかに出られて堪るものかね、萬一出たとつて妾は、お前を置去りにして逃げて往つて仕舞ふよ』

と弟の方を顧みながら、ニツコリ笑つた美しさ。こんな山深い里に、どう云ふ幸福を前世に持つて生れて來たかと思はれるほどの美しく、氣高い容貌。況してや山家

に生ひ育つたゝけに、厭味な都風にも染まず、どこまでも初々しい態度は、錦上更らに花を點ずるもの、譬はゞ嵯峨野の奥なる小督の局の伏屋が軒の寛のもとに、寒月に對して綻ぶ一輪の薄紅梅とも見られやうか。

如何なればこそ、かゝる山里に、かくまで美しの處女が潜むにやとの疑は、此の荒んだやうな山路で、此の娘に行き會ふ人の胸に宿る大きな、そして深い謎であつたのだらう。

『それぢやまだ日も高い樣だから、いつもの通り、此處でちよつくり休んで行こうかね』

『あゝさうしやう』

と姉弟は、肩の荷を外して、おの〳〵憩ふに便よき切株に腰をおろして、がつかりした氣を、吻とつく溜息に洩らす。

姉と弟は暫時無言で、笠置の方角に當つて、正に春づかんとする暮日の、雄大壯

嚴なる光景に見とれて居た。

『なあ姉さあ、俺等はどうして村の衆に、あゝ窘められるだらうな、何も別に惡い事をして居る理由でもねえし、村の衆の邪魔になるやうなことした覺えもねえだに……』

突然思ひ出したやうに弟は叫んだ、さうして充分己れの胸を滿足さするに足るだけの答へを姉に求めるやうに――。

『京一や、またお前はその事を云ひ出したのかい。村の衆が窘めやうと、どうしやうと此方が默つてさへすればいゝんだよ、今更そんな事を云ハ出したつて、もと〳〵妾達親子三人はこんな運命をもつて生れて來て居るんだから仕方がないやね』

『だつてそれが解らねえぢやねえかね』

『だとお前は云ふけれども、身分が身分だもの』

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

『さあ其處だよ。身分はどれだけ低いか卑しいか解らねえけんど、矢張り同じ皮を被つた人間でねえか、何も畜類呼はりをするにも當らねえだ』

と弟は若い血潮を顏の面に漲らせ、非常に興奮した有樣で、無念さうに齒を嚙みしめてこう云つた。何故か姉のみは、今までの快活らしい調子は消え失せて、美しい面に憂はしい表情を泛べて俯向いたまゝ、足許の枯草を踏みにじつて居るのみで、何とも答へる氣色だに見せぬ。

村人から畜類呼ばゝりまでされて、淋しい年月を送ると云ふ此の姉と弟の身分は抑も如何なるものであるのだらうか。

二

笠置山二の木戸の舊蹟から向ふ、森や丘、さては打ち續く廣い野面を越して椀を伏せた樣な小山のあたりは、笠置の山に、元弘の悲しき昔を偶ぶべく訪ふ人の、解

脱の鐘や、皇居の跡、彌勒岩から搖ぎ石などゝ共に必らず見逃す事の出來ぬ場所になつて居る飛鳥路村と呼ぶ小邑である。

太平記の幾頁を茲に繰り返す迄もなく、陶山小宮山の逆賊勢が裏山の間道から夜討を仕懸け、行在所は炎上、畏くも後醍醐の帝は、馴れ給はぬ御徒歩の痛ましくも、名利に眼眩んだる逆臣の毒手を逃れ給ふべく、木津の瀨音にまで、御心惱ませられつゝ、今の洞仙峰のあたりを落ち給ひたるいとも口惜しき、彼の敗軍は、實に此の飛鳥路村からその因を發して居る。陶山小宮山の逆臣輩、流石に精鋭を選つて仕掛ける軍も、笠置の天險極めたる要害に沮まれて利なきを悟り、茲に術つきて、飛鳥路の村に入りこみ、

『誰そ笠置の間道を案内する者はなきや、褒美の烏目若干を取らするに……』

と戸毎にその人を求めたれど、誰あつて、貧しき生活こそすれ君臣の大儀を滅却した亂臣賊子輩の手引せうとて、起ち立る者一人もなく、何れも、

『切角の御所望ぢやなれど、ついぞ笠置あたりに用とてもなき此の村人、一の木戸から二の木戸への本道は知つておぢやれど、蔦の蔓深い間道までを得知るものはおざりませぬ』

と辭み合ふた、中に桶屋の媼あり、不心得にも僅かの褒美に目がくれ、

『強いが克つは戰國の習ひよ。禁裏樣とてお味方の少ない世に敗軍なさるに不思議のおじやりませぬ。村の人行かぬとなら、此の媼が手引しませうほどに、今宵夜討なされませ』

と案内知つたる、木津川べりより屏風がへしを、彌勒岩のあたりへ出る裏道に逆賊勢の陣頭に立つた。

笠置は濡手で粟よりまだ容易く落城、遂に主上をして「さして行く笠置の山を出でしより天が下にはかくれ家もなし」と嘆かせ給ふに至りたる、恐懼に餘る邪曰となりたること、實に此の飛鳥路村の桶屋が媼の舌一枚から起つたことである。

されば後世の人々、飛鳥路村の人々を憎むのあまり、

「あれは逆子の住む村よ」

と明治の聖代に至るまで、他村からの交通は勿論、嫁取り婿取りなどは堅くせぬ慣例にした。飛鳥路村の百餘人は、憎むべき媼一人の爲めに遂に人の世に棄てられ、此の村に生るゝ者は、穢多呼ばゝりまでされたのが原因で、ついに今では此の村から出るものは、皆な穢多よ、新平民よとして取り扱はれる。

閑話休題。

さきの姉弟の家柄は昔から此の飛鳥路の村に續いて居たので、今對岸の山麓落窪ケ谷に移つても、あの親子は穢多よ、調里よ、寄らば汚れるぞと、多くの村人は卑み蔑すみ、路の往來にまで、あざみ笑ひ、些細のことにまで角芽立つて、打つ蹴るとさまざまな虐げかた、二十餘年此の姉弟が、生れぬ先より親の重藏夫婦は、涙に曇つた淋しい生活を山峽の伏屋の軒に送つて來たのである。

生業をしても里人が相手にして呉れぬので、食代着代にはならぬより、山のかげの幾所かの些やかな田畑に僅かの作物して、口すぎの代となし、足らず前は親子が夜な〳〵藁砧の下から打ち出す、幾足かの草鞋を月に二三度、木津から奈良の町まで背負ひ出して、金に引替へると云ふことにして居た。

此の姉弟は、姉をお冬と呼び、弟は京一と名けられ、十九に十七の二歳違ひ、弟は二つ下でも男だけに柄は至つて大きい。

父親は重蔵と呼び今年五十五、妻のお幾は五年前の冬、雪の朝、裏山の猿穿を見廻りに往つての歸るさ、鎖された雪路を谷へ辷つて雪崩の下に埋められ、それと知れて掘り出した時にはもう髪の一條一條まで氷りはて〻、棒のやうに死んで居た。

或ひは村人の爲に突き落されたとも取沙汰するものもあるけれども、それもいつしか春の日の雪解けと共に、秘密は木津川の深い瀬に沈んだのか、流れたのか、噂はパッタリ止まつて仕舞つた。

それ以來父子三人水入らず、雪に泣く朝、月に嘆ずる夜もあつたが、さりとて結句浮世と縁が遠い丈けに、重藏が奈良の町より買つて戻つたあられ酒に舌鼓打ちつゝ、火打燒の甘きを喜び合ふ姉弟の睦じさを喜び笑ふ花の夕もあつた。けれども一年の暦を繰れば、村人の辛らく當るに泣く日の方が多いのは云ふまでもない。

『俺らあどうしても厭あだ。もうこんな薄情な村に居るのは厭で〳〵堪んねえ。一層奈良の町ん中へでも突走つて仕舞ひてえだ』

と、はや暮れかゝる日足の早さも忘れて弟の京一は呟く。

『まあ京一お前は飛んでもないことを云ふ。それぢやお父さんや妾をどうしてくれるの……それにお前こんなところに居てさへ、うるさい人の口を、奈良のやうな繁昌の町へ出て御覽、隣りから隣り、向ふの人までに明暮顏を見合はせて居りや、それこそ什麼ことを云はれるか知れやしないぢやないか、もう決して、そのやうな考へを起さないでお呉れよ』

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com